

この著者に会いたい

『第一次世界大戦と日本海軍』



ひら ま よう いち
平間洋一

(防衛大学校教授)

「総力戦」の創始者ドイツ

——本書は、まず日本参戦当時の日英米関係を分析するところから始まり、すなわち、米国がこれほどまでに当時の日本を恐れていたのは意外でした。

平間 これには三つほど要因があるんです。ひとつは、日本海軍の日本海海戦における大勝。それまで米国内には対露の日英米同盟論まであったのが、これが一変してしまふ。「いまや太平洋をめぐ

る米国の仮想敵国は日本になった」。こういうことを、米国海軍の大御所マハンが論じたからです。この人は『海上権力史論』などの著作を通し大海軍主義を提唱し、英・独・日にも強い影響を及ぼした人物です。

——海軍力こそが植民地争奪戦の鍵とされるなか、日本海軍は侮れない存在になった。

平間 そう。それから二つ目の要因が、日露戦争後の不景気による日系移民の増大。日本国内では失業率が高まり、働き先を求めてハワイやカリフォルニアにどっと移民が流れた。これが、すでに大量に移民として渡っていたイタリア系移民の猛反発を呼んだ。

——ドイツ皇帝ウィルヘルム二世が言い出したといわれる「黄禍論」も、ちょうど世界中に広まっていったころです。

平間 まさしく三つ目の要因が、そのドイツのカリブ海進出。英仏に対抗するため急速に海軍力を強化したドイツは、アフリカ、ニューギニア、南洋諸島など

[聞き手]

ふち さわ 淵澤

すす 進

(フリーランス・ライター)

いまでも軍事を抜きにして外交は語れない。

また、軍事なき外交は力がなく、国際関係を不利にする。そういついふと二つ目の目を向けてもらいたかった。

に加えて、中米にも植民地を獲得しようとしたため、米国とは対立が激化する。

——ときあたかもメキシコ革命が勃発し、米国の隣国メキシコでは内乱状態が続いている最中です。

平間 そこで、ドイツは、反独感情を反日感情に転化しようとして、すでに西海岸で表面化している人種問題を巧妙に利用した謀略をめぐらす。日本・メキシコ同盟説のデマを流したり。また、在米ドイツ人による日本脅威論も盛んに喧伝される。たとえば全米独米協会会長などは、一九一四年、日本が参戦すれば必ずや太平洋上の諸島嶼までも占領し、ひいては米国に戦争を仕掛けてくるだろう、というようなことをカリフォルニア州知事に打電し、対日危機を煽っている。

——その集大成のようなものが一七年のツインマーマン事件ですね。それが対

第一次世界大戦。日本は日英同盟にもとづき対独戦に踏み切った。だが、ついに欧州に陸軍を派遣することはなかった。はたして日本は、従来の研究書が語るように、北方進出への野望をかなえるテコとしてのみ参戦したのか。そしてまた、連合国側は一枚岩だったのか……。本書は、元海上自衛官にして軍事外交史専門家の手による初の日本海軍から見た第一次世界大戦研究。軍事が外交を動かす国際政治のダイナミズムを見事に描ききり、現代日本の危うさに警鐘を鳴らす。なお、本書のベースは慶應義塾大学に提出した博士論文。軍事をタブー化する世論に抗した同大の英断に拍手を送りたい。

第一次世界大戦と
日本海軍

平間洋一

平間洋一

慶應義塾大学出版会
本体4000円

日警戒心や対日不信感を増大させる大きな原因になったといわれていますが。

平間 ドイツ外務大臣ツインマーマンがメキシコ駐在ドイツ大使に宛てた暗号電報ですね。これは独墨日同盟の画策を命じたものですが、これが明るみに出て米国内を席巻していた対日脅威論が一層激化していく。

——日本参戦が遅れた背景にもドイツの情報操作があったようですね。

平間 日英の海軍力が強固な同盟関係になれば、圧倒的なシーパワーの前に太平洋からインド洋にかけてドイツはついている隙がなくなる。そこで、日英を分断するため、盛んに英国に対し、人種戦争の野望を抱く日本を参戦させるのか、といったデマを流して牽制した。そのため、英国も開戦当初は日本に協力を求めながらも戦域制限を求めるなど躊躇するわけです。これは、第一次世界大戦後に大きな影を落とします。ほんとうに、ドイツには引つ掻き回されています。こういう情報操作や経済戦争、国民総動員体

制をも戦争に導入したからこそ、ドイツは「総力戦」の創始者となったわけですが。

「治」について乱を忘れるな」

——本書の最大の特徴は、軍事ブレゼンスが外交関係に与える影響を解き明かしていることにあります。この視点からの研究が必要と思われた理由は？

平間 現在日本の大学で国際関係論というところ、イコール外交史、あるいは地域研究、人間学などが常ですね。これには女子学生をもっと入学させようという大学経営上の思惑もあるのでしょうか、ともあれ軍事を柱に据えることを毛嫌いでしてきた。しかし、湾岸戦争ひとつみてもわかるように、いまでも軍事を抜きにして外交は語れないわけです。また、軍事なき外交は力がなく、国際関係を不利にする。そういうことに目を向けてもらいたかったわけです。

——まさしく、本書で取り上げられてゐるように、日本陸軍の派兵拒否（しかし武器輸出でカネ儲け）もあり連合国中

したかったのだから。

——砲艦外交は現在も生きている。

平間 もちろんです。私自身、練習艦隊主席幕僚を務めていたとき、ビノチエトがクーデターを起したチリに入港したことがあります。これは大使にはめられたようなのですが（笑）、理由としてはこういうことです。日本は日露戦争のとき、日本がなければ、とチリの艦隊旗艦であるエスメラルダという軍艦を譲ってもらっている。いま軍事政権ということでチリは国際的に孤立しているけれど、こういうときにこそ恩義を返さなくてはならない。参ったなと思いましたが（笑）、とにかく行って見た。そうしたら自由主義諸国のどこも練習艦隊を派遣してはなかった（苦笑）。でも、チリにとっての意味は大きかった。翌年から米國とチリの共同軍事演習が開始されていますから。

——まさしく海軍のブレゼンスが外交を突き動かしていますね。

平間 一昨年には、韓国ではじめて日本の練習艦隊が公式訪問しています。こ

対日不信の念が渦巻いているなか、第二特務艦隊が連合国軍隊輸送船の護衛のため地中海に派遣されたことは外交上大きな意味があったようですね。

平間 そうです。講和会議全権のひとつり駐イタリア大使伊集院彦吉は、こう語っています。日本が「五大國ノ一トシテ重ンゼラレ欧州ノ問題ニマテ容喙シ得ルニ至ツタノハ……地中海派遣艦隊が戦場ノ中心ニ乗出シテ悪戦苦闘シタコトハ、最モ与カツテ力アルモノ」。

——湾岸戦争時、この問題については……。

平間 『中央公論』誌上で「第二特務艦隊の教訓」という論文を書きました。これがきっかけで、外務省も動き、海上自衛隊の掃海艇が派遣されることになったといってくれる人もいます。

——陸軍が動けず海軍が動けた理由は、どこにあるのでしょうか。

平間 陸軍というのは国民からガラス張りの状態に置かれますから。国民の意向にひきまされる。それから、そもそも

れは、日韓の国交上面期的なことです。緊張・対立関係がある国には絶対軍艦を入港させられませんから。

——軍艦が公式訪問できるということは、当該二国間の友好関係を国内外に知らしめる示威行動となるわけですね。

平間 要するに、軍事力には有事から平時までいろいろな使い方があるといえることです。ですから、第二特務艦隊にしても大戦終了後、ヨーロッパ各国を戦勝行進しにくわけです。これを見て、各国の国民は、「日本もあんな遠くからやはり駆けつけていたのか」と反感を和らげる。湾岸戦争でもワシントンで戦勝行進したでしょう。それに韓国は行けたけれど、派兵しなかった日本は行けなかった。「やはり日本はエコノミック・アニマルか」という反応が出て不思議じゃありません。こういうことを日本では国民の多くが理解していません。

軍事という反射的に侵略戦争を想起し、現実の外交政策上必要な側面にまぎる目をつぶって国際関係を悪化させてしま

陸軍のグランド・ストラテジーとしてドイツ軍の完敗などシナリオになかったことが大きいですね。それまでの戦争で一國が世界中から完膚なきまでに叩かれたことなどなかった。だから、中立的立場をとることによってアングロサクソン民族である英米を牽制するため、戦後にはドイツと同盟を結ぼうという深謀遠慮があったのだと思います。

——その点、海軍は日英同盟を基軸にしていることもあり、機敏に動けたので

平間 海軍力というのは、機動力と「Show the flag」のブレゼンス力なんです。連合国四百隻のうち日本海軍が派遣したのはわずか十二隻（のちに十六隻）にすぎなかった。けれど、行った、旗を揚げた、ということが外交上では意味をもつ。湾岸戦争のときも同じで、最後まで派遣をためらった韓国は結局二十名前後のバイロットだけ派遣しています。米國としてはこれで大満足だったわけです。とにかく派兵国の旗の数を増や

っている。

——日本固有の論理だけで主観的に国際関係を理解しているところがありますね。

平間 で、世界を見た日本人はダブルスタンダードに悩まされるわけです。自衛官も外交官も商社マンも。

——そういったなか、自衛官として生きる支えとなったのは何でしょうか？

平間 防衛大学校四年生のときに、陸海空の代表として吉田茂首相のもとに呼ばれたことがあります。そのとき吉田首相は、こうおっしゃったんです。「君たちは一生日陰者だろうが、それに耐えて治めて乱を忘れるな」の精神で国民の安全を守りぬいてほしい。国益を度外視した『平和論者』があふれているが、ほんとうに貿易立国日本の平和を願うなら、世界最強の国米國との自由貿易・安全保障体制こそ重視しなくてはだめだ」。

この言葉をもう一度、国民の皆さんに深く噛みしめていただきたいと思います。